モンゴル人の叙事詩吟誦の伝統的な慣習について

S.バイガルサイハン（S.Baigalsaikhan） 博士（Sc. D）・教授
B.サインゲレル（B.Saingerel）
モンゴル国立大学総合科学部文学芸術学科博士研究生

モンゴル英雄叙事詩は、モンゴル人である私たちの祖先が数百年、数世代にわたって創作し保存してきた、精神遺産の大いなる至宝である。モンゴル叙事詩は、モンゴルの民間伝承のきわめて古いジャンルの一つであり、数百行から数万行の詩によって構成された巨大な創作物である。

叙事詩作品は古代のフェティシズム、シャマニズム、仏教、神話、そして芸術の多くの年代層にわたる思潮を保持しており、昔話、故事、伝説、祝詞、賛詞、ことわざ、格言、撒乳や祝賀の儀礼詞、吉兆詞、呪詛詞，祈祷詞など、口承文芸の多くのジャンルを内包しているのが特徴的である。

モンゴル叙事詩の言語には驚愕すべき芸術的な美しさがあり、モンゴル詩の秀逸な伝統を保持した古式ゆかしい語句や、モンゴルの多くの部族の口頭方言の特徴が内包されている。

モンゴル人には古来、叙事詩を尊重し、戦闘や巻狩りへの出立、山水の祭祀、生業の改善などの民間および国家の儀式の際に、叙事詩を吟誦してきた伝統がある。叙事詩は国家の慣例だけではなく、家庭の慣例においても重要な位置を占めている。

モンゴル人の叙事詩を吟誦する伝統と慣習を詳細に研究すると、自然環境、気候、民族状態、象徴を表現した特徴が見て取れる。たとえば、ハンガイ地方のアルタイ山脈の高峰、河川、森林が数多く存在する地域のバヤド人やドゥルベド人の著名な叙事詩の語り手たちは、叙事詩を吟誦する前に「アルタイ吟誦（Алтай хайлах）」という名称の、特別のプロットを持つ、具体的な英雄の登場する賛詩（叙事詩）をトブショールの調べとともに語る。オリヤンハイ人の著名な叙事詩の語り手たちは、「アルタイ賛詞（Алтайн магтаал）」をトブショールの調べとともに語る。オリヤンハイ人の叙事詩の語り手たちは、トブショールという楽器を自分たちで巧みに製作し、足の速い血統の種馬の尻尾の毛で弦を作って張る。トブショールを演奏しながら叙事詩を吟誦することは、何らかの隠された魔力を呼び起こすのに少なからぬ役割を果たす高貴な行為だと言われている。したがって、叙事詩を語ってもらう家庭は、叙事詩の語り手の元に赴き、叙事詩を吟誦してくれるよう伝えてから、語り手の許可を得て、そのトブショールを特別の布に包み、自宅にあらかじめ持ち込んで、敬意を表する場所に置いていた。叙事詩を吟誦し終えてから３～７日間は、そのトブショールに手を触れてはならず、家長が最後に語り手の元に届けるという細かい規則があった。叙事詩の語り手を招いた家庭は、自宅に綿布（褡裢布）、磚茶、煙草などの物品を包んで用意し、トブショールの糸巻部分か頭部に白い綿布（бөс）を結びつけておく。

ゴビ地方の温暖な気候の、山岳や河川が少なく、植生もまばらな特徴を有する地域のハルハ人の著名な叙事詩の語り手たちは、叙事詩を吟誦し始める前に、吟誦する叙事詩の主人公の英雄の居住する地域、水系、畜群、動物、鳥類、家屋をモリンホール（馬頭琴）の調べに乗せて方言で吟誦し賛美するだけでなく、昔話のように語ることもある。

ゴビのハルハ人たちは、叙事詩を吟誦してもらうために語り手を自分の家に招来するとき、

側対歩の馬（жороо морь）を連れて赴き、その語り手を乗せて帰ってくる。語り手が来ると乳茶を沸かし、ウルム（クリームチーズ）入りの乳製品を調える。すると、山水の主である龍神たちがわれ先にと争って叙事詩を聞こうとするので、彼らへの感謝の念を象徴して、燈明に火をともし、杜松（ねず／juniper）や立麝香草（たちじゃこうそう／thyme）を供えるのである。ハルハの著名な叙事詩の語り手のロドン氏は、叙事詩を吟誦するとき、調えられた乳製品のウルムをスプーンですくい取り、乳茶の入った薬缶やドンボ（取っ手の付いた壺状の容器）の注ぎ口の上にそのウルムを乗せ、叙事詩の吟誦が終わると、叙事詩の灌頂（かんじょう）[1]が浸透したウルムが熱い乳茶に溶けて混ざり込むことにより、乳茶を清める儀礼が執り行われるのである。このようにして、山水の主の龍神たちは歓喜し、自然世界には雨水の恵みがもたらされ、緑の草木が広がり、家畜の群れが健やかに育ち、すべての家が豊かになることを象徴している。叙事詩の吟誦が終わるとすぐに、全員で「ホライ」を三唱して吉祥と幸運を祈願し、叙事詩を吟誦してもらった家は語り手に敬意を表して、最上の物品であるハダク（絹布）と最上の食品である磚茶を贈る伝統的な慣習がある。

文献

１．J.ツォロー『モンゴル英雄叙事詩』、ウランバートル、1982 年、4,10 頁。

２．R.ナラントヤー「歴史詩学研究の理論と歴史の問題」（研究発表）、『内陸アジアの叙事詩』（内陸アジアの叙事詩第 1 回シンポジウム発表論文集）、ウランバートル、1997 年、112 頁。

３．B.サインゲレル『ウムヌゴビの叙事詩の語り手たち』、ウランバートル、2020 年、24 頁。

フィールドワークの記録

４．科学アカデミー言語文学研究所文書保管所、X-5, ДT-49a, XH-15。

５．ハルハ人の叙事詩の語り手の故サンジーン・ロドンの娘 L.ホルローと会見したフィールドワークの記録、ウムヌゴビ県ダランザドガド郡、2022 年 3 月。

６．ハルハ人の叙事詩の語り手の故サンジーン・ロドンの娘 L.ホルローと会見したフィールドワークの記録、ウムヌゴビ県ダランザドガド郡、2022 年 5 月。

７．ハルハ人の叙事詩の語り手の故ツェベグミディーン・デジドの娘ビャンバスレンと会見したフィールドワークの記録、ウランバートル市、2023 年 3 月。

[1] 頭頂に水を灌（そそ）ぎ、その人物がある位に進んだことを証する仏教の儀式。サンスクリット語アビシェーカ abhiṣeka またはアビシェーチャナ abhiṣecana, モンゴル語アブシグ abisig (авшиг)。